

〔総 説〕

入院中の患者・家族への看護実践における『相互作用』に関する スコーピングレビュー

今井 美佳¹⁾ 熊谷 理恵²⁾ 柳原 清子²⁾

要 旨

家族システムを対象とする家族看護実践では、複数の相互作用による影響が考慮される。ガイドラインを参考に、患者・家族への看護実践における相互作用に関して、国内および国外文献をスコーピングレビューし、入院中の患者とその家族メンバーにかかわる家族看護実践研究の現状と課題を検討した。医学中央雑誌Web版Ver. 5, CHINAL, MEDLINEを用い、プロトコルに沿って文献の絞り込みを行い、国内文献12件と国外文献5件の計17件を分析した。

現状としては、(1) これまでの機能や役割が変化した家族システムは不安定であり、特に、意思決定や喪失等の状況課題も重なる患者・家族への看護においては、家族メンバーの相互作用に注目した看護実践が重要になる。(2) 家族システムの相互作用に注目した看護実践において、対象となる家族メンバーの範囲や家族システム内の関係や立場への看護師の考慮は、様々であった。(3) 家族システムと援助者である看護師自身の相互作用をどう考慮していたのかの検証が十分に行われていない。

課題としては、(1) 対象である『家族』をシステムとして、ミクロやマクロの視点を切り替えながら援助を行う家族看護特有の実践を探究することが重要である。(2) 看護師が、家族メンバーの相互作用や家族システムと自分自身の相互作用をどのように意識していたかという視点からの研究が必要である。

キーワード：患者・家族への看護実践、相互作用、スコーピングレビュー

1. 緒 言

家族看護では、患者を「家族」という集団の中で捉える。家族は、夫婦・親子・きょうだいといった立場と役割をもつ複数のメンバーから成る集団である。そのメンバーは個人としての考え方（認識・感情）を持ちながら他のメンバーとのやりとりのなかで、育児、セルフケア（看病や介護等）、メンバーの社会化といった機能を維持しており、看護の直接対象となる患者もそのメンバーである。家族看護で患者を捉えるということは、このように患者を家族という集団の一員として、他の様々な家族メンバー

との相互作用の中に居る存在として考えることである。そして、そのような存在を援助対象とする家族看護実践においては、看護師には複数の相互作用の影響が考慮されていることが考えられる。

看護師-対象者関係は、看護実践において中心的または基礎的なものであるという見方がある（Robinson, 1996）。そして、看護実践における人間関係の概念枠組みを示したペプロウや、トラベルビーが唱える看護理論では、援助関係における相互作用が重要な概念として扱われている。どちらも保健上の問題解決という目標に向かうプロセスそのものを看護とし、患者と看護師という一対一の相互作用によってプロセスが進展していく様子が述べられている（ペプロウ／中山, 2020；トラベルビー／岡谷, 2020）。

1) JA長野厚生連佐久総合病院佐久医療センター

2) 長野県看護大学看護学部看護学科

ところが、家族看護においては、援助の相手となる患者や家族メンバーは、個人であっても、家族という集団の中で常に他者からの影響を受けている存在であることに意識を向けた実践が求められる。つまり、家族看護実践においては、単純な援助者-対象者という二者関係の枠組みに基づく相互作用だけでは収まらない視点を伴った対応が必要となることが考えられる。この点については、先行文献（Forchuk, Dorsay, 1995）においても、「ペプラウの理論を単独で用いるのに比べ、ライトとリーヒーのアプローチは個人と家族の両方を明確に考慮していること、どちらも相互作用の視点から看護を捉えていることから、2つのアプローチを組み合わせることで明確な看護理論に基づいた家族への働きかけが可能になる」と言及されている。

そこで、患者およびその家族に対して行われた看護実践を探求した研究のうち、相互作用について取り上げた研究の内容を調査し、看護師が、看護実践の対象としての家族の範囲をどのように捉えているのか、家族メンバー間および家族と看護師間の相互作用にかかわる看護実践においてどのようなことを意識しているか、それらの看護実践内容についてどのような知見が述べられているのかを明らかにする。そして、メンバー間で相互作用しあう家族という集団を対象とする家族看護実践における研究課題を明らかにすることとした。

II. 方 法

これまでにも、患者およびその家族に対して行われた看護実践を探求した研究は認められており、看護実践において相互作用は重要視されている。しかし、家族看護実践研究において、特に実践における相互作用に注目した内容について、先行研究の知見の整理がされておらず、具体的な研究内容を概観することが必要と考えた。そこで、研究領域の基盤となる主要な概念や利用可能なエビデンスを概説することを目的とするスコーピングレビュー（Arksey,

O'Malley, 2005）を選択した。PRISMA-ScRのガイドライン（友利, 澤田, 大野, 他, 2020）に基づいて、国内および国外文献をスコーピングレビューした。その結果から、家族看護における相互作用に注目した家族看護実践研究の現状と課題を述べる。

1. 用語の定義

本研究においては、患者を「家族」という集団の中で捉える。亀口（2005）の述べる家族療法における対象理解方法を含め、本研究においても家族看護が対象とするものは「家族システム」とであるとし、文献レビューにおいて分析に用いる用語を以下のように定義した。

- ・家族システム：患者を含む個々のメンバー（個人システム）からなる集団で、夫婦、親子、きょうだい、等心理的に結び合ったいくつかの諸部分（サブシステム）も含む。メンバー間やメンバーを取り巻く環境・人物（看護師も含む）との間で情緒的パターンや行動レベルの相互作用を伴う存在。
- ・家族内相互作用：家族メンバー間の相互作用。一対一のものに限らない。
- ・家族外相互作用：家族システムは、援助者や周囲の環境との相互作用をもつが、本研究では、家族システムにかかわる援助者との相互作用を示すものとする。
- ・相互作用：家族システムのメンバー間、あるいは、家族システムにかかわる援助者と家族システムを構成するメンバー間で、互いに働きかけ、影響を及ぼしあっている状態。
- ・看護実践：日本看護協会の定義からは、看護実践という概念には、エビデンスなどの科学的、理論的知識を根拠とすることに加えて、実践において目指すべき方向を導く道徳と倫理、人間固有の体験理解に基づく創造的なかわり、看護職自身の自己成長、さらには看護実践に影響を及ぼす社会や文化、制度の理解と関与を含む、と言われている（日本看護協会, 2007）。看護師の行為だけでは看護実践として説明が不足すると判断し、本研究では概念が内包するものも参考に、「看護職が

対象に働きかける行為であり、行為を導いた看護師の認識を内包するもの」とした。

2. 文献検討の実施手順

1) 研究疑問を特定する

ガイドラインに示された研究疑問作成のためのフレームワーク (Population, Concept, Context) をもとに、P (対象者) を「患者とその家族」, 「看護師」とし、C (概念) を「相互作用」, 「家族看護」, 「看護実践」とした。そして、C (コンテキスト) を「家族システム」とした。これらをもとに研究疑問を、『患者とその家族メンバーにかかわる看護師の看護実践を探究した研究のうち、看護師が家族内の相互作用或いは家族システムと看護師の相互作用に注目している文献では、どのような看護実践が行われているか、相互作用にかかわる看護実践において看護師が意識している事柄の記述はどのようなものがあるか』とした。

2) 重要な研究を特定する

重要な研究を特定するための文献検索式を検討した。医学中央雑誌Web版 Ver. 5にて、『相互作用』のシソーラス検索を行い、関連キーワードとしては、『看護職-患者関係』, 『患者-家族関係』, 『医療従事者-家族関係』, 『人間関係』が該当した。そこで発表年数の絞り込みはおこなわず、検索キーワードを①(((家族看護/TH or 家族看護/AL)) and ((看護職-患者関係/TH or 看護師-患者関係/AL)) and ((患者-家族関係/TH or 患者-家族関係/AL)) and ((医療従事者-家族関係/TH or 家族-医療従事者関係/AL)) and (PT=原著論文))として検索したところ、13件の文献を特定できた (2024年1月4日 14時48分検索)。また、『人間関係』については、下位に相互作用-人間というキーワードがあったため②(((家族看護/TH or 家族看護/AL)) and ((家族/TH or 家族/AL)) and ((患者/TH or 患者/AL)) and ((看護師/TH or 看護師/AL)) and ((人間関係/TH or 相互作用-人間/AL)) and (PT=原著論文))で検索した結果、784件の文献が特定された。さらに、『相互作用』をキーワードとし、

③(((家族看護/TH or 家族看護/AL)) and ((家族/TH or 家族/AL)) and ((患者/TH or 患者/AL)) and ((看護師/TH or 看護師/AL)) and (相互作用/AL)) and (PT=原著論文))でも検索したところ16件が特定された。

さらに、家族看護学はその基盤に一般システム理論を発表したBertalanffyのシステム理論を基盤に置いていることから、『システム』でもシソーラス検索を試みた。『システム』ではシソーラス用語としての登録がなかったが、関連するキーワードとして『システム論的アプローチ』と『システム分析』があり、『システム分析』の下位キーワードに『システム思考』があった。こうしたことから、④(((家族看護/TH or 家族看護/AL)) and (家族/TH or 家族/AL)) and (患者/TH or 患者/AL)) and (看護師/TH or 看護師/AL)) and (システム論的アプローチ/TH)) and (PT=原著論文))で検索したところ、1件 (2024年2月12日 1時34分検索)。そして⑤(((家族看護/TH or 家族看護/AL)) and (家族/TH or 家族/AL)) and (患者/TH or 患者/AL)) and (看護師/TH or 看護師/AL)) and (システム分析/TH or システム思考/AL)) and (PT=原著論文))で4件 (2024年2月12日 10時40分検索)であった。

CHINAL, MEDLINEにおいても同様のキーワードで、言語を英語とし出版物タイプをJournal Articleに限定した条件で検索した (2024年1月4日 16時20分)。その結果、①(family nursing) and (Nurse-Patient Relationship) and (Patient-Family Relationship) and (Health Care Provider-Family Relationships) が0件、②(family nursing) and (Family) and (Patient) and (Nurse) and (human relations) が11件、③(family nursing) and (Family) and (Patient) and (Nurse) and (Interaction) が118件であった。また、『システム』については、『Systems』をCHINALの統制語システムで検索すると下位概念にSystems Theoryが位置づけされていたため④(family nursing) and (Family) and (Patient) and (Nurse) and (Systems Theory)で検索し、23件

であった(2024年2月27日 21時50分検索)。

3) 研究を選ぶ

これらの論文から、日本看護協会の学術大会誌、病院の研究雑誌、雑誌掲載文や解説、モデルを用いたアセスメントや介入等の症例報告等を除外した。さらに、タイトルと要旨から、論文の内容が相互作用について取り上げた内容以外の文献を除外した(選抜)。選抜によって残ったのは国内文献35件、国外文献14件であった。それらの文献の本文を取り寄せ、以下の選定条件に沿って精読した。

- ・論文の研究課題が、患者を含む家族メンバー同士(家族内相互作用)あるいは家族メンバーと看護師の相互作用(家族外相互作用)に注目した看護実践の内容についてであること。
- ・示された看護実践について、その具体的な記述があるもの。
- ・分析過程が精巧に示してあること。

上記について、具体的には、相互作用というキーワードが含まれていても、患者家族への看護実践を通した看護師の成長体験や姿勢・看護観について述べている文献や、相互作用を伴う看護実践に向けた教育的要因を述べた文献、相互作用体験に対する患者・家族の思いを述べた文献は、対象外とした。

その結果、国内文献においては、①については3件、②については7件、③については2件、④については0件、⑤についても0件の、合計12件の文献が適格性になうと判断できた。国外文献においては、②は1件、③は3件、④は1件(①は該当する文献がなし)で、合計5件であった。上記和文献12件と国外文献5件の計17件をレビュー採用文献とし、分析した(表1)。文献の抽出プロセスを図1に示した。

4) データを抽出する

レビュー対象文献となった文献を読み、以下のデータ項目を抽出した。

- ①論文題名、②著者／出典、③発行年、④目的、⑤研究デザイン、⑥看護実践が対象とする家族の範囲(家族内相互作用、家族外相互作用)、⑦相互作

用の様相およびそれに対する看護実践の記述内容、⑧相互作用にかかわる看護実践において、看護師が意識している事の記述。

なお、⑥看護実践が対象とする家族の範囲については、看護師が家族内相互作用へ注目した実践か、家族外相互作用に注目した実践か、論文の記述内容から研究者が読み取った。その際、先行研究(西垣、堀口、小林、他、2021)が用いていた、家族看護が対象とする『家族の課題』を参考に、相互作用に注目した看護実践が、家族システムのどの部分の課題に向かっているものかも、記載内容から研究者が読み取り分類した。家族メンバー個人の課題(個人システム)・家族メンバー同士の課題(親子、夫婦、きょうだいなどのサブシステム)・家族の課題(複数のサブシステム～家族システム全体)で分類した。

3. 倫理的配慮

対象とした先行文献の著作権を侵害しないよう文献検討を実施した。分析結果については、複数の研究者間で表示の妥当性や文献内容を歪曲して捉えていないかなどについて検討した。

III. 結 果

1. 相互作用に注目した看護実践が発生した臨床場面

対象文献において、相互作用に関する看護実践が発生した場面を、家族看護が必要となる場面や状況(上別府、井上、新井、他、2021)によって分類した結果を図2に示した。これによると、相互作用に関して取り上げた、患者とその家族への看護実践を探求した研究は、いずれも「家族成員が疾患や障害をもつとき」と「家族のライフサイクルが移るとき」に該当した。「家族成員が疾患や障害をもつとき」においては、入院初期等の障害や疾病の発生直後から、移行期、長期療養期、終末期まで、幅広い時期で研究が行われていた。「家族のライフサイクルが移るとき」は、家族の発達段階で見ると、家族形成期から養育期、青年期のこどもの自立の時期や、慢性的に続いた療養に変化があった時期や老年

表1. スコーピングレビューの対象に採用された文献一覧

文献 番号	題名	著者 (発行年)	目的
1	The parent-nurse relationship in the neonatal intensive care unit context-closeness and emotional involvement	Fegran L, 他 (2009)	未熟児が入院した際の親と看護師の緊密な関係についての親と看護師の経験を調査する
2	Interaction between family and nursing team: Implications for treatment of oncologic of patients	Lima Marques, 他 (2014)	看護スタッフと家族の相互作用から生じる緩和ケア患者のがん治療効果を明らかにすること, 看護スタッフとがん患者の家族の関係を理解すること
3	Caregivers' experiences of interaction with families expecting a fetally impaired child	Majjala H, 他 (2004)	奇形児の出産を控える家族とケア提供者の相互作用について, 実践的な家族看護の理論を生成すること
4	The meaning of interaction between nursing professionals and newborns/families in a hospital setting	Pinheiro EM, 他 (2008年)	新生児病棟でのケア提供中の新生児/家族との相互作用における看護チームのコミュニケーションの意味を理解し, この経験の代表的な理論モデルを開発すること
5	Health care relationships revisited	Robinson CA (1996)	家族看護介入のプロセスと結果を探るため
6	認定・専門看護師の終末期がん患者と家族間の対話支援の実践	浅野志保, 他 (2023)	がん看護領域の認定・専門看護師による終末期がん患者と家族間の対話支援の実践内容を明らかにすること
7	人生の終焉を生きる場の選択におけるがん高齢患者と家族の合意に向けた看護実践の構造	三原綾, 他 (2022)	人生の終焉を生きる場の選択におけるがん高齢患者と家族の合意に向けた看護実践の構造を明らかにすること
8	がん終末期の意思決定で生じる家族内葛藤に対する家族支援専門看護師の実践—急性期病院からの移行に焦点をあてて	蓮見歩, 他 (2022)	がん終末期の患者家族が急性期病院から移行する際の意思決定において生じる家族内葛藤に対し, 家族支援専門看護師 (以下, FCNS) が行っている看護実践について明らかにすること
9	「退院後の療養場所に関する患者と家族との意向のずれ」に対する退院支援看護師の支援	石川倫子, 他 (2022)	「退院後の療養場所に関する患者と家族との意向のずれ」に対する退院支援看護師の支援を明らかにすること
10	救命救急センターに勤務する看護師の重度意識障害患者の家族への関わりの特性	木元千奈美 (2014)	救命救急センターに勤務する看護師のこれまでの経験を振り返った語りを通して, 重度意識障害患者の家族への関わりの特性を明らかにすること
11	要介護高齢者の在宅移行における家族の意思決定を支える看護師の技	奥田満代, 他 (2008)	在宅移行における要介護高齢者の家族の意思決定を支えるために, 看護師がこれまでの経験を活かして, どのような技を用いているのかを明らかにする
12	回復期リハビリテーション病棟看護師の自宅への退院援助プロセス	小野美喜 (2006)	回復期リハビリテーション病棟において, 自宅退院に困難を感じた患者家族の自宅退院への援助プロセスを明らかにすること
13	熟練看護師による終末期がん患者と家族間の対話支援に関する内容分析	浅野志保, 他 (2022)	熟練看護師が, 終末期がん患者と家族間の対話をどのように支援しているのかを内容分析で明らかにすること
14	療養先の選択に意見が相違している終末期がん患者と家族に対するがん看護専門看護師の調整	中井尚美, 他 (2021)	終末期がん患者と家族とのあいだで, 療養先の選択について意見が相違しているとき, がん看護専門看護師はどのように調整しているのかについて明らかにすること
15	進行性がん患者とその家族の療養体験の変容—看護師とのパートナーシップの過程における相互行為に焦点を当てて	千崎美登子 (2018)	進行性がん患者・家族と看護師とのパートナーシップの過程における相互行為がどのように行われたのか, その特徴を明らかにし, それらによって成し遂げられる彼らの療養体験の変容を明らかにすること
16	症状に苦悩するがん患者と予期悲嘆を抱える家族へのプレゼンスと緩和ケア—相互作用による変化のプロセス	榎本恵子 (2022)	症状に苦悩する終末期がん患者と予期悲嘆を抱える家族にプレゼンスと緩和ケアを実践し, 相互作用のプロセスを可視化することにより, どのような変化が生じるかを明らかにする
17	血液・腫瘍疾患をもつ青年が親と医療者とともに意思決定を支援する看護実践ガイドラインの開発	有田直子, 他 (2019)	血液腫瘍疾患をもつ青年が親と医療者とともに意思決定の看護実践ガイドラインを開発すること

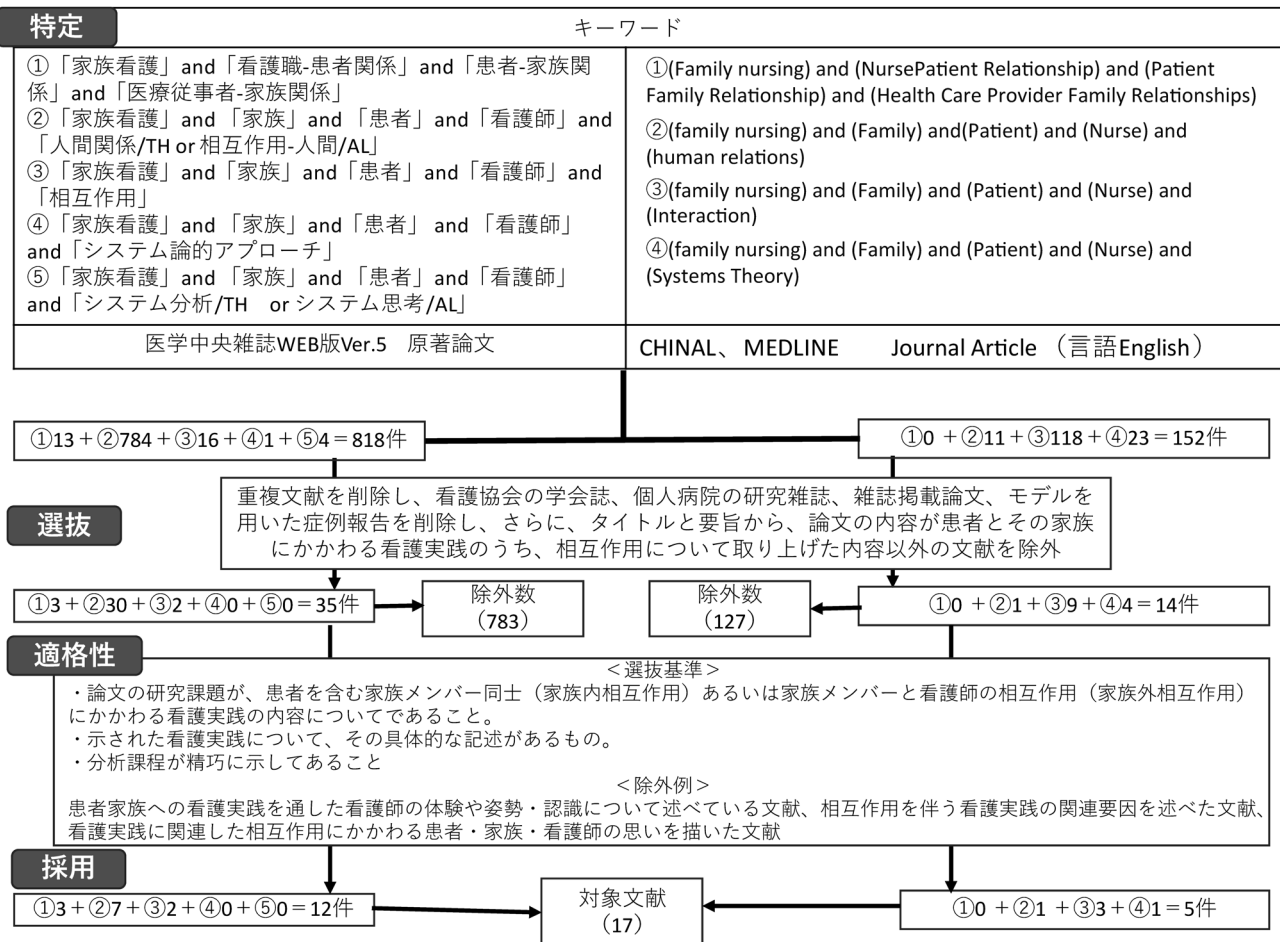


図1. レビュー対象文献の抽出プロセス

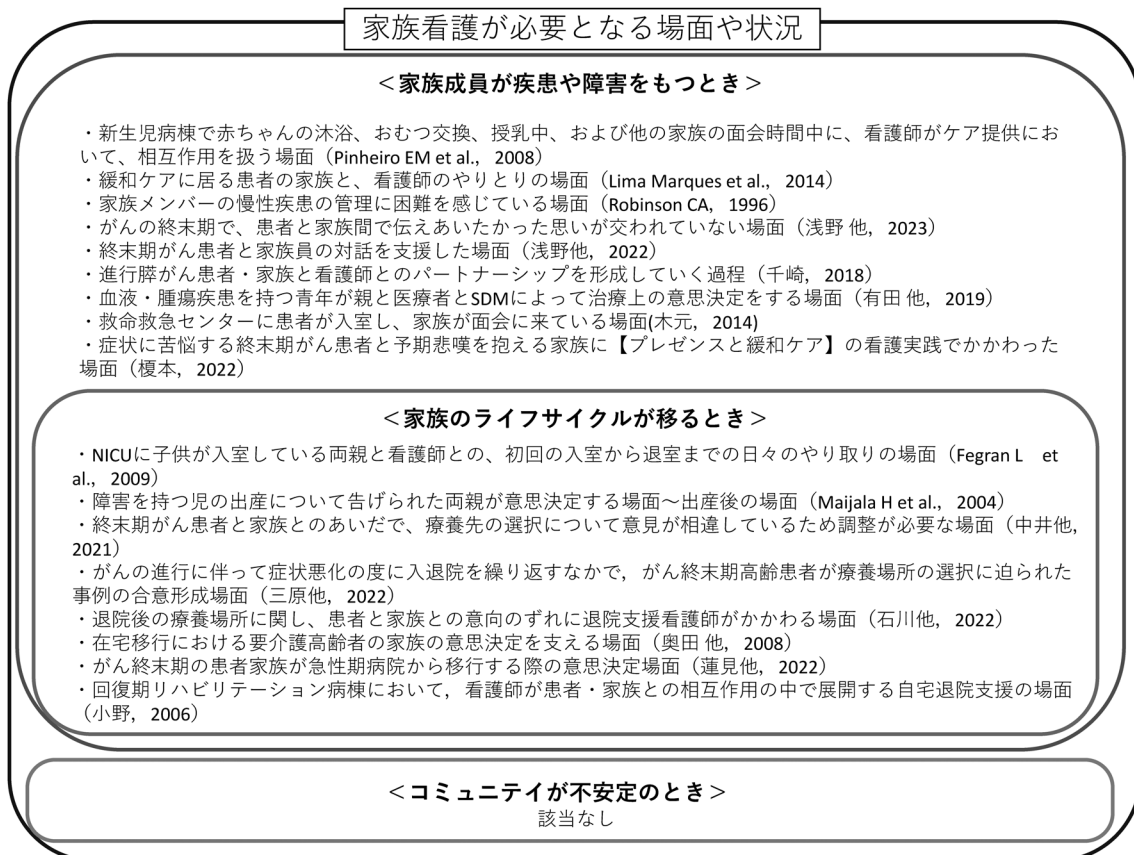


図2. 家族看護が必要となる場面や状況

期、家族メンバーの介護・死別の時期であった。これらは、家族メンバーに加入や交代、メンバーの減少といった変化が生じており、「家族成員が疾患や障害をもつとき」に、さらに家族の移行という課題が重なる場面であった。なお、コミュニティが不安定な時とは主に大規模災害などで地域の機能が働かなくなった時とされている（上別府，他，2021）。文献選定の過程で、過去の震災や感染症流行時の家族看護を検証する研究もいくつか散見されたが、症例を用いた実践報告等にとどまっており、未だコミュニティが不安定な時における具体的な家族看護実践の研究はなされていなかった。

また、採用された17件はいずれも入院中の患者・家族を対象とした看護実践研究であり、在宅や地域看護領域での文献は含まれなかった。

2. 看護実践が対象とする家族システムの範囲（家族内相互作用，家族外相互作用ごと），および相互作用とそれに対する看護実践の記述内容（表2，3）

1) 看護実践が対象とする家族システムの範囲（家族内相互作用・家族外相互作用）

(1) 家族内相互作用

看護実践が対象とする家族システムの範囲が、『家族』と表記されていても、その実際は家族メンバー（患者も含む）個人の課題を対象範囲としたもの、家族メンバー同士（サブシステム）の課題を対象範囲としたもの、複数のサブシステム同士～家族全体までの課題を対象範囲としているもの、と様々であった。また、看護実践の対象となるシステムの具体的メンバーや、メンバー間の具体的相互作用までは記載がない文献も認めた（Maijal, Paavilainen, Väisänen, et al., 2004；Pinheiro, Silva, Angelo, et al., 2008；Robinson, 1996；浅野，古瀬，2023；三原，真継，2022；石川，小原，2022；小野，2006；木元，2014；奥田，八百川，川村，他，2008；浅野，古瀬，2022；中井，山田，北谷，他，2021；有田，中野，2019）。

一方、看護実践の対象となる家族を、家族システ

ムとしての特徴がある存在と前提することが論文中に記載されていた文献は、3件（Robinson, 1996；蓮見，中山，井上，2022；奥田，他，2008）あり、パートナーシップの過程における相互行為が看護師・患者・家族の間にあることを理論的枠組みとした研究が1件であった（千崎，2018）。これらの文献では、システムに含まれるメンバーの立場やメンバー間の具体的相互作用の様子までは具体的に記載がないものの、看護実践が、メンバー個人から家族全体へと、看護師により意識的に分けられている状況を読み取ることができた。

(2) 家族外相互作用

対象文献のうち、家族外相互作用に対する看護実践が記されたものは14件あった。しかし、『偏見を持たずに親をサポートしようとする姿勢を示す』（Fegran, Helseth, 2009）や『共感を表現した』（Maijala, et al., 2004）のように、具体的な看護実践が家族システム内のどのメンバーを対象としたのかがあいまいであった。また、『家族と話ができるタイミングや話を聞く』『家族の心配な部分を明らかにしたり、家族から患者との関係性を聞くことで家族の内部に入る』（石川，小原，2022），『家族間のつながりを大切にする』（奥田，他，2008）のように、実践する際の看護師と家族システムの相互作用の詳細までは触れていない記述であった。さらに、家族内相互作用を対象とした看護実践に比べ、家族外相互作用に対する看護実践の記述は少なかった。

2) 看護実践の対象となっていた家族システムの相互作用とそれに対する実践の記述

看護実践は記述されているものの、看護実践の対象としてアセスメントされた家族システム内の相互作用，家族システムと看護師との相互作用について、その様子までは記述されていない文献もあった。新生児集中治療室における両親と看護師の機密な関係における看護師の経験について述べた研究では（Fegran, Helseth, 2009），看護師と夫婦（両親）サブシステム間での相互作用にかかわる看護実践が述べられている。「両親の立場になって話しかけ

表2. 看護実践が対象とする家族システムの範囲および相互作用とそれに対する看護実践の記述内容（家族内相互作用）

文献番号*	相互作用にかかわる看護実践が対象とする家族の範囲と相互作用の様相およびそれに対する実践の記述：家族内相互作用 (★：看護実践の対象となるシステムの具体的メンバーや、メンバー間の具体的相互作用については記載なし)		
	家族メンバー個人 (対象：個人システム)	家族メンバー同士 (対象：サブシステム)	複数のサブシステム同士～家族集団全体 (対象：家族システム)
1			
2	(患者個人システム) ・スタッフの献身的な対応は、心理的に母を助け、安全を与えた ・患者に一番近いところにいる		
3		(両親サブシステム間★) ・援助者は父親の意見を聞くことを通して、父親を議論の輪に巻き込もうとする ・情報を両親に向けて発信する	(家族全体★) ・胎児障害は家族全体の問題であり、家族関係についても多大なエネルギー需要がある、と捉える
4	(新生児個人システム) ・新生児の身体的および精神的な依存を認識し、新生児とコミュニケーションを取る (母親個人システム) ・ファーストコンタクトでは挨拶する ・母親がよそよそしい、または母親が挨拶しないのを観察したとき、母親に近づき、挨拶し、母親の様子や子供の名前を尋ねる		(新生児とその両親★) ・絆を確立するために、さまざまな手段を使って赤ちゃん和父母と対話する ・両親と看護師の交流の中で子供たちに愛を伝え、家族のニーズに応える ・家族と対話しながら、その家族がどのようなものであるかを特定し、彼らの行動や反応に意味を帰し、親に関する印象を形成する
5	(慢性疾患を患う患者) (家族内の母／妻役割を担う女性の個人システム) ・家族の直面している恐怖に触れる		(システムとしての性質をもつ家族全体★) ・家族に他者の視点からの捉え方を示すことで話し合いを促す
6	(がん患者個人システム) ・苦痛や制約に対応して対話の素地を整える	(がん患者と家族メンバー★) ・患者と家族の自分から伝えるニーズを見極める ・患者と家族間で思いを共有できるように働きかける ・家族にとってどのようなアドバイスや情報提供があれば家族の中で解決する力が生まれるのか考えた	
7	(がん患者個人システム) ・本人の気持ちや希望に向けて何ができるのか何度も話し合い目標を定めていけるよう方向転換した ・患者のサービス導入への抵抗感を理解する ・タイムリーに専門職と連携し、できるだけ早く選択肢を提示できる体制づくり ・病状から自宅へ帰るには今しかないというタイミングを見極める	(がん高齢患者と家族メンバー★) ・弊害になっているものがないかをキャッチし、互いへの気遣いが合意形成を妨げていた可能性に気づいて早めに介入 ・すり合わせ ・現実的な選択をしてもらえるように働きかけた ・【患者・家族の代弁と生き様の共有】	(家族全体) ・退院前後にカンファレンスを開き、同行訪問した際には、常に在宅医と連携しておりバックアップ体制があることや訪問看護へは24時間SOSが出せることも伝えた
8	(がん終末期患者の家族メンバー個人) ・【家族員の困りごとを捉え、情緒的支援を行う】	(がん終末期患者と家族メンバー) ・【患者と家族員から、がんへの向き合い方や今後の生き方に対する思いを引き出す】 ・【患者と家族員それぞれの意向の背景にある価値を探り、共通点を見出す】 ・【患者と家族員が互いを理解し、歩み寄れるよう調整する】 ・【患者と家族員がそれぞれの思いや価値を共有することを促す】 ・【患者と家族員が円滑に話し合うための準備をする】 ・【話し合いの場で、患者と家族員の対話を進行させる】	(家族全体) ・【家族内葛藤の成り立ちを把握する】 ・【家族同士のやり取りを観察し、家族の関係性や課題を把握する】 ・【家族にとって良い選択肢を共に考え、家族の目標に向かって合意形成できるよう支援する】
9	(患者個人システム) ・限られた入院期間の中で関係性をつくり、患者の本当の気持ちを聴きだす (家族メンバー個人システム；子や配偶者等) ・患者が自宅に戻ることにためらう家族の本心を理解 ・家族が患者の意向に沿わないことで後悔しないように背中を押す	(患者と家族とのサブシステム★) ・患者と家族の双方が納得できるように「施設」という段階を経て、患者が自宅に戻れるように進める支援 ・患者と家族の退院後の療養場所に対する意向を確認し合えるように間に入る	

表2. 看護実践が対象とする家族システムの範囲および相互作用とそれに対する看護実践の記述内容（家族内相互作用）（続き）

文献番号*	相互作用にかかわる看護実践が対象とする家族の範囲と相互作用の様相およびそれに対する実践の記述：家族内相互作用 （★：看護実践の対象となるシステムの具体的メンバーや、メンバー間の具体的相互作用については記載なし）		
	家族メンバー個人 （対象：個人システム）	家族メンバー同士 （対象：サブシステム）	複数のサブシステム同士～家族集団全体 （対象：家族システム）
10	（患者個人システム） ・ADL獲得介入 （介護者個人システム） ・介護者の年齢や健康状態などから介護量の多さに耐えられるかという「介護負担の分析」を行う ・自宅退院や施設退院について参考となる情報を提供 ・「選択肢のイメージ化を助ける」	（患者と家族メンバー★） ・家族関係を見計らう ・「家族間緊張の感知」「家族間緊張の緩和感知」 ・それぞれと向き合いながら正直な気持ちをきく ・患者の立場を考えた看護師の意見を伝える ・患者と家族を交えた退院後のケア体験を援助する	
11	（家族メンバー個人システム） ・家族が大きく動揺し、感情を表出している場面では、無理に質問せず、見守りながら落ち着くのを待つ ・家族が倒れないよう安全を確保したり、そばに付き添って話を聴いたりし、即座に家族へ近づく ・家族に現実を受け入れてもらうよう働きかける	（患者と家族メンバー★） ・変化した患者に戸惑い、近づくことができない家族に対して、患者のそばへ近づけるよう働きかける ・患者のわずかな反応をキャッチし家族に伝える ・家族が面会に訪れた際にはベッドサイドへ行き患者の状態を説明する	
12	（家族メンバー個人、患者個人） ・【患者・家族の意向をコントロールする】	（患者と家族メンバー★） ・【家族の情緒を支える】	（家族全体） ・【家族力を見極める】 ・【家族のパワーを強化する】
13		（終末期がん患者と家族メンバー★） ・【表立って現れていない患者と家族の本当の思いを確認する】 ・【家族なりの思いの伝え方を尊重しながら介入の必要性をアセスメントする】 ・【患者と家族が向き合えるよう対話の環境を調整する】 ・【患者と家族の思いの言語化を促進する】	
14	（終末期がん患者、家族メンバーそれぞれ） ・【患者や家族が死を迎える準備をしながら生きること支える】 ・【患者と家族が持つ力を取り戻せるよう助力する】	（終末期がん患者と家族員★） ・患者と家族と医療者が遠慮せず自然体で話ができる環境をつくる ・【患者と家族が病状と気持ちの変化に順応できるように促す】 ・【患者と家族が合意できる療養方法を導き出す】 ・【患者と家族のこれまでの生き方に対する意思を引き出す】	
15			（家族集団） ・患者・家族の対人関係を把握 ・療養生活における患者・家族の重要な関心事を確認し、家族の特徴と発病後の家族の変化を理解するために家族を含めた対話をする ・療養生活で生じている家族役割の葛藤へ関連する話題を提供し、その話題への患者・家族の反応を見極め、患者・家族から求められた場合の援助
16	（患者個人システム） ・ライフレビューを傾聴し、会話も困難となった現状への嘆きをわちあう ・息を吐くことや感情を吐露することが困難となったつらさを受けとめ、沈黙の時間を共有する ・担当医師の病状説明が受け容れがたいことを受けとめ、背中をさすり黙ってつらい状況をわちあう ・非言語的コミュニケーションやタッチングを駆使 ・伝えたい思いに寄り添う	（夫婦サブシステム） ・患者の、家族の期待に応えたい気持ちを受けとめ、リハビリの頑張りを代弁する ・妻の下肢麻痺への悲嘆、回想を傾聴し、悔やむ気持ちを共有する ・妻とそばで見守り、A氏が苦しそうな顔をするたびに、一緒に胸や手をさする ・妻の予期悲嘆、夫婦の人生のライフレビューを傾聴しながら共有する	
17	（青年患者、患者の親それぞれ） ・「青年と親各々に敬意を払う」	（青年患者と親の親子サブシステム★） ・「親子間の感覚の共有」 ・「青年と親がとっている決定のバランスへの配慮」 ・「親子の折り合いをつける」	

*文献番号は表1と同じ

表3. 看護実践が対象とする家族システムの範囲および相互作用とそれに対する看護実践の記述内容（家族外相互作用）

相互作用にかかわる看護実践が対象とする家族の範囲と相互作用の様相およびそれに対する実践の記述：家族外相互作用 (★：看護実践の対象となるシステムの具体的なメンバーや、メンバー間の具体的な相互作用については記載なし)			
文献番号*	家族メンバー個人と看護師 (対象：個人システム)	家族メンバー同士と看護師 (対象：サブシステム)	複数のメンバー同士～家族集団全体と看護師 (対象：家族システム)
1		(看護師と両親サブシステム★) ・両親の立場になって話しかける。 ・押しつけがましくなく、偏見を持たずに親をサポートしようとする姿勢を示す ・両親が看護師に望む対応のシグナルを理解する	
2			(親族と看護師★) ・親族と看護師がコミュニケーションをとる
3		(援助者と両親サブシステム) ・障害児の妊娠というものはきわめて個人的な家族の問題であり、家族の決断に敬意を表す ・両親の準備ができるまで傍に居る ・両親の気持ちを知ることはできないが理解していることを示し、共感を表現した	
4	(看護師と新生児) ・ケアを通じて交流を始めると、目標が決まる。その意欲に動かされた看護師たちは、赤ちゃんの母親役を目指して行動を起こす ・専門家が母親の役割を演じるとき、子どもとコミュニケーションをとり、さまざまなやりとりの中で母親を解釈し、子どもの反応に意味を帰す	(看護師と新生児・親の親子サブシステム★) ・知覚、感受性、直感に代表されるスキルの活用 ・子供の健康回復を促進するために母親と子供に近づく準備をし、コミュニケーションに有利になる ・家族と交流する準備をし、母親の態度に対応できるようにする	
5	(看護師と家族メンバー個人) ・思いやりのある他人として家族メンバー各々の立場にたつことで、家族にコミットし、奔放なかかわりが継続できる。 ・家族メンバーの信念を否定しない		(看護師と家族システム★) ・好奇心旺盛な聞き手として家族に関心を示す ・思いやりのある他人として家族に巻き込まれる事で治療的関係を形成する
6			
7	(看護師と家族メンバー個人) ・患者はもちろんのこと家族に対しても状況に合わせて待つ姿勢でかかわり、すべてを聴く ・家族へ継続的にかかわり関係性を作っていた ・意図的になるべく本人のいないタイミングを見つけて奥さんの話を聞いたり	(看護師と、がん患者と配偶者の夫婦サブシステム) ・おせっかいかもしれないけど患者さんの思いを支障のない範囲で伝えたりした	
8	(看護師と家族メンバー個人) ・【支援を見据えて家族と意図的に関わる】		(看護師（援助者全体）と家族システム) ・【患者と家族員と医療者が円滑に話し合うための準備をする】
9		(看護師と患者と家族メンバー★) ・短期間に家族に踏み入る難しさを感じながらも、家族と話ができるタイミングや話を聞く ・家族の心配な部分を明らかにしたり、家族から患者との関係性を聞くことで家族の内部に入る	
10			
11	(看護師と家族メンバー個人) ・家族への対応に戸惑いを感じながらも看護師は、様子を見ながら家族の元へ向かい、家族との関係を築こうと試みる ・家族が話せるようにする機会をあえて作る	(看護師と患者と家族メンバー★) ・面会中には、〈家族だけで過ごせるようベッドサイドから離れる〉ようにし、〈離れた場所から面会する家族の様子を観察する〉	
12	(看護師と家族メンバー個人) ・入院時からのアプローチ	(看護師と患者と家族メンバー★) ・家族間のつながりを大切にする	
13	(看護師と家族メンバー個人) ・【患者と家族となんでも話せるような信頼関係を築く】		
14	(看護師と終末期がん患者、家族メンバーそれぞれ) ・《患者と家族に常に関心を寄せていることを感じてもらう》		
15	(看護師と家族メンバー個人) ・家族関係の変化から生じている課題に対する家族員個々の受け止め方を、看護師は相槌、復唱、定式化することで語りを促し、本人たち自身がそれに応じて更に語り合う ・療養生活における家族関係の変化を理解している看護師の肯定的な見方を交えて話し合う中で、療養生活で生じている課題について家族員それぞれの立場で表出する		
16			
17		(看護師と青年患者・親の親子サブシステム★) ・「親子と看護師との距離感の調整」	

*文献番号は表1と同じ

る」,「両親の置かれた状況を理解する」,「押しつけがましくなく、偏見を持たずに親をサポートしようとする姿勢を示す」といった看護師の実践行為内容は記述されている。しかし、そのような看護実践に向かうにあたり看護師が捉えていた家族システムの相互作用までは記載されていなかった。

3. 相互作用にかかわる看護実践において、看護師が意識している事の記述 (表4)

意識とは、辞典によると「物事や状態に気が付く、心が知覚していること」とされている (デジタル大辞典, 2025)。17件の対象文献のうち、10件で相互作用に注目した看護実践を行う際の看護師の気付きや知覚についての記述を意識している事の記述として確認した。具体的内容としては、「看護師は専門的なアプローチと個人的なアプローチのバランスを見つけること (Fegran, Helseth, 2009)」,「両親の感情へ個人的なレベルまでのかかわりをしたいと思っている反面、過剰な接近は避けなくてはならない (Maijala, et al., 2004)」,「中立の立場 (浅野, 古瀬, 2023)」,「家族内外の相互作用を自身の主観で見ることなく、客観的な視座から“事実の確認”をすること (蓮見, 他, 2022)」,「面会時間前から家族の面会を意識しながら業務を行う。家族にどのような言葉を掛けるべきか戸惑いを感じる (木元, 2014)」,「タイミングをみながら/タイミングを計る、意図的にかかわる (奥田, 他, 2008)」,「看護師の目の前に現れた時間軸のみならず家族の歴史を理解し、個々の家族の状況を踏まえる (浅野, 古瀬, 2022)」,「患者と家族の中立性を保持する (中井, 他, 2021)」等であった。

IV. 考 察

『患者とその家族メンバーにかかわる看護師の看護実践を探究した研究のうち、看護師が家族内の相互作用或いは家族システムと看護師の相互作用に注目している文献では、どのような看護実践が行われているか、相互作用にかかわる看護実践において看

護師が意識している事柄の記述はどのようなものがあるか』という研究疑問のもと、医学中央雑誌Web版Ver. 5およびCHINAL, MEDLINEをデータベースとして、スコーピングレビューガイドラインを参考に文献レビューを行った。文献レビュー対象となった17件の分析結果を、家族看護実践の特徴や家族看護の知見等と併せて考察する。

1. 患者・家族への看護において相互作用が注目される場面

患者・家族にとって家族の構造の変化を伴うときは家族が不安定になると言われており (上別府, 他, 2021), 健康問題やライフサイクルの変化に伴うメンバーの移動で家族の構造が変化することは、家族に不安定な状態をもたらすことが考えられる。対象文献においては、「家族成員が疾患や障害をもつとき」という、疾病に伴い家族の構成員がこれまでの役割を果たせず家族システムの構造変化が生じた場面だけでなく、「家族のライフサイクルが移るとき」のように家族メンバーの加入や交代、メンバーの減少といった変化から家族システムの構造の変化が生じた場面も含まれた。このようなタイミングに、さらに意思決定や喪失等の状況課題が重なると、家族システムの機能も変化し問題解決能力がうまく働かなくなる可能性がある。対象文献においても、看護実践の目的を家族内のコミュニケーション促進・改善や合意形成支援とした研究が多かった。家族システムのコミュニケーション促進・改善や合意形成支援を目的とする場面では、そこに複数の家族メンバーが含まれることから、家族システム内外の相互作用を意識した看護実践が重要になると考えられた。以上のことから、家族の構造や生活様式が変化し、これまでの機能や役割が変化した家族システムは不安定であり、さらに意思決定や喪失等の状況課題も重なる患者・家族への看護においては、家族メンバーの相互作用に注目した看護実践が重要になると考えられた。

表4. 相互作用にかかわる看護実践において、看護師が意識していることの記述

文献番号*	相互作用にかかわる看護実践において、看護師が意識している事の記述内容 (☆: 意識していることと行動が明確に分けられないもの)
1	・ 傷ついた両親が目前にいて関与することで看護師と両親の関係性の本質は大変重要なものになる ・ 関係の接近により看護師は両親へのケアにコミットしていく☆ ・ 専門家としてのアプローチと個人としてのアプローチとのバランスを見つけること
2	
3	・ 対象となる家族の生活状況、労働者としての姿、そして人間や文化全般に関する問題についての個人的理解が、相互作用のゴールを決める/行動を決める☆ ・ 両親の感情の個人的なレベルまでのかかわりをしたい反面、過剰な接近は避けなくてはいけない ・ 家族の問題にとって看護師は部外者であるという意識
4	・ 知覚、感受性、直感を活用する
5	
6	・ 中立の立場
7	・ 合意に向けて、患者と家族の思いをすり合わせていくには【患者・家族の思い：極わずかなズレという正体に気づく】ことが必要☆ ・ 看護師は、家族と関係性を築いて行く中で、【待つ姿勢と揺れる思いの理解】を大切にしながら、家族に継続的にかわること☆
8	・ 患者と家族員のみならず、関わる医療者を含めてその人たちの話していた内容ややり取りの事実を確認し、どのような流れで家族内葛藤が起こっているかという全体像を把握すること☆ ・ 家族同士が話している場面で家族の座り方や話し方を観察したり、患者や家族員が話す内容などから親戚を含めた家族の関係性や課題を把握すること☆ ・ 患者と家族員が円滑に話し合うために、事前に患者と家族員と丁寧に調整を行い、話し合いに向けた準備をすること☆ ・ 患者と家族員と医療者が円滑に話し合うために、医療者側の調整を行い、話し合いに向けた準備をすること☆ ・ 話し合いの場で全体のバランスを見ながら患者と家族員が話しやすいように対話を進行させること☆ ・ 家族内外の相互作用を自身の主観で見ることなく、客観的な視座から“事実の確認”をすること☆
9	・ 最初距離を置きながら ・ いっぺんには心を開いてはくれないと思うので、ちょっとずつちょっとずつ
10	
11	・ 患者と家族を見守る☆ ・ 面会時間前から家族の面会を意識しながら業務を行う ・ 家族にどのような言葉を掛けるべきか戸惑いを感じている
12	・ タイミングをみながら/タイミングを計る ・ 意図的にかかわる
13	・ 看護師の目の前に現れた時間軸のみならず家族の歴史を理解し、個々の家族の状況を踏まえる
14	・ 患者と家族の中立性を保持する
15	
16	
17	

* 文献番号は表1と同じ

2. 家族看護における相互作用に注目した看護実践研究の現状と課題

1) 家族システム内相互作用を踏まえた看護実践の探求について

家族システム内相互作用については、特に対象となる家族メンバーの範囲についての課題がある。相互作用にかかわる看護実践の対象が『家族』と表記

されていても、結果に記された看護実践の対象範囲が家族メンバー（患者も含む）個人なのか、家族メンバー同士（サブシステム）なのか、複数のサブシステム同士～家族全体までなのか、援助の対象を明確に示されていない文献もあった。Friedman, Bowden, Jones (2018) は、5つの家族へのアプローチとして、患者の背景としての家族、個々の家族

員、夫婦や親子等の家族内のサブシステムとしての二者関係 (Dyad)、システムとしての家族、社会の構成要素としての家族を提示している。この中で、臨床の看護師が家族への支援のきっかけとするものは、患者の背景としての家族や個々の家族員であることが多い。しかし、家族をシステムとして捉える家族看護の実施においては、患者・家族を医療システムの中心に添えてミクロな視点（個人に焦点を当てる）からマクロな視点（家族全体と環境を包括的に見る）を適切に切り替えながら援助を行うことが重要であると言われている（上別府、他、2021）。そのため、家族メンバー個人への看護実践を示す場合でも、その背景にどのような家族メンバー同士（サブシステム）～家族全体への視点を含んでいるのかを併せて示すことで、家族看護としてのメンバー個人への看護実践の意図やアセスメントの詳細が具体的な知として表現されると思われる。

また、対象文献とした先行研究では、家族システム内の役割や関係性（親子、夫婦、きょうだい等）に対する看護師の実践の違いは明記されていなかった。家族メンバー間の役割や関係性を考慮した看護師の思考が示されると、複数の相互作用をもつ家族システムへの看護実践がより状況に応じた内容として示される。先行研究（西垣、他、2021）では、国内の既存の家族看護学研究において、家族員間の課題の検証とその支援についての研究が不足していることが報告されている。看護実践の対象となる家族メンバーの範囲や家族システム内の役割や関係性への考慮を含んだ相互作用を探索しない状況では、ミクロな視点とマクロな視点を切り替えながら援助を行う家族看護特有の援助が十分に探究されていない可能性が考えられた。

2) 看護師と家族システムの相互作用を踏まえた看護実践の探索について

家族看護では、「看護師の行動とクライアントの行動は、看護師とクライアントの関係において文脈化され、看護介入はすべて相互作用的なものである」と言われており（Wright, Leahey, 2009）、実践

の際の看護師の在り方は、援助者であると同時に家族システムとも相互作用する存在としての自身の姿を考慮に入れたものであることが重要である（今井、柳原、2023）。先行研究に於いては、家族システムの相互作用について看護師の意識している事までの記述が読み取れないものもあった。さらには、家族内相互作用を対象とした看護実践に比べ、家族外相互作用を対象とした看護実践の記述は少ない印象を受けた。家族看護研究としての看護実践を示す際には、看護師の行為内容だけではなく家族システムと看護師である自分自身の相互作用をどのように意識していたかの考慮も含めた視点からの研究も必要と思われる。それにより、具体的な状況下で、家族システムと看護師との相互作用を考慮するとどのような看護実践が適応となるのかをイメージすることが可能となる。同様のことは、家族内相互作用の捉え方についても言える。家族システム内の相互作用を援助者がどのように捉え、それに対して看護者自身の相互作用をどのように認識して実践に繋げたかという視点も重要である。

家族看護学研究の課題として、家族全体の課題に焦点を当てた研究のエビデンスが不足している状況は、家族看護学研究の臨地での利用、実装を検討する際の阻害要因となっている可能性が指摘されている（西垣、他、2021）。家族看護の対象は複数のメンバーとその関係性からなる家族という集団であり、常に動的要素を含んだ家族システムである。この点を意識し、家族全体の課題においてはどのような相互作用が家族内そして家族外に起きているのか、家族システム内外の相互作用に注目していくことが重要と考える。

3. 家族システムの相互作用に注目した看護実践における看護師の意識を探索することの意義

先に述べた、家族という集団を支援対象とする際の、家族システムとも相互作用する存在としての看護師の在り方（今井、柳原、2023）とは、看護師自身が家族システムと対峙している際にどのような意識で在るのか、という点から考えることもできる。

意識とは、国語辞典によると「物事や状態に気が付く、心が知覚していること」とされている。

相互作用にかかわる看護実践の内容には、「中立性を保持する」といった家族システムにかかわる際の看護師の姿勢について述べたものや、「かかわりをしたい反面過剰な接近は避ける」などの対象者との関係の築き方、「面会時間前から家族の面会を意識しながら」、「意図的にかかわる」等の実践に向けた戦略、「時間軸のみならず家族の歴史を理解する」等の家族システム理解のための視点、について記載がされていた。このような『姿勢』、『対象者との関係の築き方』、『実践に向けた戦略』や『対象理解のための視点』を導く看護師の意識については、まだ十分研究がなされていない部分でもある。

看護業務の中でどのようにして家族看護実践が行われていくかを探索した研究からは、看護師が家族への支援においてタイミングを計っていることが報告されている（今井，柳原，2015）。先行研究からは「看護師が家族と意図的に相互作用することが必要であり，相互作用を通して家族の健康体験における意味づけや必要な支援の検討に繋がる」とも言われる（Meiers, Brauer, 2008）。相互作用に注目した看護実践の内容と併せて，未だ十分に目を向けられていないこのような看護師の意識を深く詳細に探求することで，折々の看護業務の中でどのような意識で家族システムとの相互作用に臨んでいくことができるかの具体例を示すことができる可能性がある。それにより，家族の体験している健康上の課題において，どのような援助が必要かを焦点化するための知見が得られると考えられた。

隄，菊池，山崎，他（2019）は，今，臨床の看護職には家族の多様性に対応することだけでなく，短期間で家族への介入の必要性を見極め，効果的に家族支援を行う力が求められていると述べている。多重業務の中，限られた時間のなかでどのように家族にかかわれるのか，ということは現場の看護師たちの間でも関心が高い。家族看護実践の性質をより具体的に探究することで，タイミングを逃さない実

践に向けた示唆が得られる可能性がある。

V. 結 論

スコーピングレビューのガイドラインを参考に，入院中の患者とその家族メンバーにかかわる看護師の看護実践を探索した研究を文献検討した。17件のレビュー対象文献から，家族看護実践研究における現状と研究課題を以下に示した。

現状としては，以下の3つのことが挙げられた。

1. 家族の構造や生活様式が変化し，これまでの機能や役割が変化した家族システムは不安定であり，特に，意思決定や喪失等の状況課題も重なる患者・家族への看護においては，家族メンバーの相互作用に注目した看護実践が重要になる。
2. 家族システムの相互作用に注目した看護実践においては，看護実践の対象となる家族メンバーの範囲や家族システム内の関係や立場への考慮は，様々であった。
3. 家族システムと看護師である自分自身の相互作用をどのように考慮していたのかの検証が十分に行われていない。

研究課題としては，以下の2つのことが挙げられた。

1. 家族看護実践研究として，対象である『家族』をシステムとして，ミクロやマクロの視点を切り替えながら援助を行う家族看護特有の実践を探究することが重要である。
2. 家族看護研究としての看護実践を示す際には，具体的な状況下で，どのような看護実践が適応となるのかをイメージできるよう，家族メンバーの相互作用や家族システムと看護師である自分自身の相互作用をどのように意識していたかという視点からの研究が必要である。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、率直な意見とデータ分析方法の指導をくださった清泉大学看護学部の小口翔平先生には大変感謝いたします。

各著者の貢献

MIは研究の発案、研究デザイン、データ収集、データの解釈、論文草稿執筆の全てのプロセスを担った。RKは研究デザイン、データの分析方法、論文の質向上に関わった。KYは、論文全体の構成と質向上に関わった。全ての著者は論文の最終稿を確認して投稿に同意した。

〔受付 24.08.22〕
〔採用 25.01.20〕

文 献

- Arksey H., O'Malley L.: Scoping studies: towards a methodological framework, *International Journal of Social Research Methodology*, 8(1): 19-32, 2005
- 有田直子, 中野綾美: 血液・腫瘍疾患をもつ青年が親や医療者とともに行う意思決定を支援する看護実践ガイドラインの開発, *高知女子大学看護学会誌*, 44(2): 44-55, 2019
- 浅野志保, 古瀬みどり: 熟練看護師による終末期がん患者と家族間の対話支援に関する内容分析, *北日本看護学会誌*, 24(2): 13-23, 2022
- 浅野志保, 古瀬みどり: 認定・専門看護師の終末期がん患者と家族間の対話支援の実践, *北日本看護学会誌*, 25(2): 7-17, 2023
- デジタル大辞泉: 意識. <https://www.weblio.jp/content/%E6%84%8F%E8%AD%98?dictCode=SGKDJ>. 検索日 2025年7月7日
- 榎本恵子: 症状に苦悩するがん患者と予期悲嘆を抱える家族へのプレゼンスと緩和ケア相互作用による変化のプロセス, *日本がん看護学会誌*, 36: 111-118, 2022
- Fegran L., Helseth S.: The parent-nurse relationship in the neonatal intensive care unit context—closeness and emotional involvement, *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 23(4): 667-673, 2009
- Forchuk C., Dorsay J. P.: Hildegard Peplau meets family systems nursing: innovation in theory-based practice, *Journal of Advanced Nursing*, 21: 110-115, 1995
- Friedman M. R., Bowden V. R., Jones E.: *Family Nursing: Research, Theory, and Practice* (Fifth edition), 37, APPLETON & LANGE, U.S.A., 2018
- 蓮見 歩, 中山美由紀, 井上敦子: がん終末期の意思決定で生じる家族内葛藤に対する家族支援専門看護師の実践—急性期病院からの移行に焦点をあてて, *家族看護学研究*, 27(1-2): 51-62, 2022
- 陸 智子, 菊池良太, 山崎あけみ: 家族看護実践に影響を与える要因に関する文献検討, *大阪大学看護学雑誌*, 25(1): 89-95, 2019
- 今井美佳, 柳原清子: エスノグラフィーを用いた一般病床での家族看護実践における「関わりの見極め」, *日本家族看護学会誌*, 20(2): 56-67, 2015
- 今井美佳, 柳原清子: システムを解釈する方法としての『円環的認識論』—家族看護における位置づけと活用—, *日本家族看護学会誌*, 29: 51-59, 2023
- 石川倫子, 小原美帆子: 「退院後の療養場所に関する患者と家族との意向のずれ」に対する退院支援看護師の支援, *看護実践学会誌*, 34(2): 12-21, 2022
- 亀口憲治: *家族療法的カウンセリング* 初版第2刷, 14-15, 駿河台出版社, 東京, 2005
- 上別府圭子, 井上玲子, 新井陽子, 他: 系統看護学講座別巻 家族看護学 第1版第5刷, 6-13, 150, 医学書院, 東京, 2021
- 木元千奈美: 救命救急センターに勤務する看護師の重度意識障害患者の家族への関わり特性, *家族看護学研究*, 19(2): 124-135, 2014
- Lima Marques D. L. O., Laranja C., Silva M. C. D., et al.: Interaction between family and nursing team: Implications for treatment of oncologic of patients, *Journal of Nursing UFPE*, 8(8): 2811-2815, 2014
- Majala H., Paavilainen E., Väisänen L., et al.: Caregivers' experiences of interaction with families expecting a fetally impaired child, *Journal of Clinical Nursing*, 13: 376-385, 2004
- Meiers S. J., Brauer D. J.: Existential caring in the family health experience: a proposed conceptualization, *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 22(1): 110-117, 2008
- 三原 綾, 真継和子: 人生の終焉を生きる場の選択におけるがん高齢患者と家族の合意に向けた看護実践の構造, *ヒューマンケア研究学会誌*, 13(1): 9-20, 2022
- 中井尚美, 山田理絵, 北谷幸寛, 他: 療養先の選択に意見が相違している終末期がん患者と家族に対するがん看護専門看護師の調整, *看護ケアサイエンス学会誌*, 20(1): 3-14, 2021
- 日本看護協会: 看護にかかわる主要な用語の解説—概念的定義歴史的変遷社会的文脈— 2007. <https://cmskoho.nurse.or.jp/nursing/home/publication/pdf/guideline/yougokaisetu.pdf>. 検索日: 2023年10月31日
- 西垣佳織, 堀口範奈, 小林京子, 他: 『家族看護学研究』の掲載論文の家族の課題とエビデンスレベルの分析, *家族看護学研究*, 26(2): 223-229, 2021
- 奥田満代, 八百川啓子, 川村佐知, 他: 要介護高齢者の在宅移行における家族の意思決定を支える看護師の技, *家族看護*, 6(1): 127-134, 2008
- 小野美喜: 回復期リハビリテーション病棟看護師の自宅への退院援助プロセス, *日本看護研究学会雑誌*, 29(1): 97-105, 2006
- ヒルデガート・E. ペプロウ／中山洋子: 看護における人間関係の概念枠組み, (筒井真優美 編), *看護理論家の業績と理論評価* 第二版, 115-130, 医学書院, 東京, 2020
- Pinheiro E. M., Silva M. J., Angelo M., et al.: The meaning

of interaction between nursing professionals and new-borns/families in a hospital setting, *Revista Latino-Americana de Enfermagem*, 16(6): 1012-1018, 2008

Robinson C. A.: Health care relationships revisited, *Journal of Family Nursing*, 2(2): 152-173, 1996

千崎美登子：進行性がん患者とその家族の療養体験の変容—看護師とのパートナーシップの過程における相互行為に焦点を当てて，*日本がん看護学会誌*，32：159-169, 2018

ジョイス・トラベルビー／岡谷恵子，人間対人間の看護，（筒井真由美 編），看護理論家の業績と理論評価 第二

版，223-235, 医学書院，東京，2020

友利幸之介，澤田辰徳，大野勘太，他：スコーピングレビューのための報告ガイドライン 日本語版：PRISMA-ScR，日本臨床作業療法研究，7：70-76, 2020

Wright L. M., Leahey M.: *Nurses and Families A Guide to Family Assessment and Intervention* (5th edition), 7-44, F. A. Davis Company, Philadelphia, 2009

https://www.academia.edu/37173925/Nurses_and_Families_A_Guide_to_Family_Assessment_and_Intervention_5th_edition. 検索日：2022年7月19日

A Scoping Review of “Interaction” in Nursing Practice with Hospitalized Patients and Families

Mika Imai ¹⁾ Rie Kumagai ²⁾ Kiyoko Yanagihara ²⁾

1) Saku Central Hospital Advanced Care Center

2) Nagano College of Nursing, School of Nursing, Department of Nursing

Key words: nursing practice for patients and families, interaction, scoping review

The effects of multiple interactions are considered in family nursing practices within the family system. With reference to these guidelines, a scoping review of national and international literature regarding interactions in nursing practice with patients and families was conducted. We examined the current status and issues in family nursing practice research involved with hospitalized patients and their family members. Using the Central Journal of Medicine Web Ver. 5, CHINAL, and MEDLINE, the literature was narrowed down according to the protocol, and a total of 17 articles (12 Japanese and 5 international) were analyzed. The current situation is as follows: (1) Family systems are unstable, as their functions and roles have changed, and nursing practice that focuses on the interaction of family members is important, especially in nursing care for patients and family members who also face situational issues such as decision-making and loss. (2) In nursing practice that focuses on the interaction of family systems, nurses' considerations of the range of target family members and their relationships and positions within the family system varied. (3) Nurses' consideration of the interactions between the family system and themselves as assistants has not been sufficiently examined. It is important to explore the unique practice of family nursing, in which assistance is provided while switching between micro and macro perspectives, with the “family” as the target system. It is also necessary to conduct research from the perspective of nurses' awareness of the interactions among family members and their interactions with the family system.